14、
「突然、何、言い出すんだよ。俺は、そんなとこ行かないって」
しばらく硬直して、美咲の顔を眺めていたが、目を逸らしたままの美咲がまた、歩き出したのと同時に、俺は、美咲を引き留めるように口を開いた。
「俺は、美咲と一緒にいるって言ったろ」
それでも美咲は足を止めずに、引っ張られるように歩き出した俺に、前を向いたまま振り返りもせずに言った。
「ありがと、でも、あたしといたって・・・」
美咲は、言葉を詰まらせた。
俺は、なぜ、美咲が突然そんなことを言い出したのか、その真意が知りたかった。俺は、その後も、ずっと美咲になんでそんなこと言うのか問いただしたが、美咲は、ただ黙って遠くを見つめて歩くだけだった。

その日の晩、二人は、食事をしながら、他愛もない話で盛り上がった。俺も、もう美咲に「なぜ」と聞くことはなく、美咲も、その話を持ち出すことはなかった。でも、俺は、その時まだ、美咲が、本当に出ていってしまうとは夢にも思っていなかった。これが、美咲との最後の晩餐になるなんて思ってもみなかったのである。俺は、慣れない病院の疲れもあり、美咲が寝付く前に先にベッドに入り寝てしまった。そして、夜は更け、闇が二人を包み込んでいった。
俺が、また気付いた時、それは、冬の朝の光が俺の瞼を照らし、俺が、まぶしそうに薄目を開いた時だった。そして、そこには、いつも隣に寝ているはずの美咲がいない。
「んっ、美咲っ！？」
俺は、飛び起き、すぐ横のベッドの掛け布団を叩いて確認したが、人の塊は手に当たらない。周りを見回した。
「えっ、まさか、本当に・・・」
俺は驚いてベッドから飛び降りた。
部屋の隅に置いてあったはずの美咲の大きなボストンバックとその隣の化粧ポーチが無くなっていた。コンセントに差し込んであるはずの携帯の充電器が見当たらないのに気付いた時、俺は初めて、美咲がもう戻らないのでは、と思い血の気が引いた。そして、状況を改めて認識した俺は、愕然とした。しばらく部屋の隅を見つめたまま動かなかった俺は、慌てて携帯を手に取ると美咲を呼んだ。しかし、いくら呼んでも美咲の声を聞くことはできなかった。俺は、とにかく美咲を探そうとワイシャツに手を通したところで、美咲の行き先に全く心当たりがないことに気付いた。
俺は、みるみるうちに目の前が真っ暗になっていくのが分かった。美咲と知り合って、確かにまだ日も浅い。しかし、美咲のことをあまりに全く何も知らないことに俺自身、驚きもした。

そして、これが、本当に呆気ない美咲との最後だった。
その後も、美咲の携帯に、たびたび連絡をした。しかし、美咲が携帯に出ることはなく、無残に呼び出し音を耳に残すだけだった。会社の行き帰りに、探しもした。幾度となく、あの銅像を拝みにも行った。しかし、美咲を見つけるどころか、気持ちを落ち込ませてアパートまでの道のりをただ歩くだけだった。

「おはようございます」
新年の挨拶以来、俺は、何度、石原印刷を訪れても、愛美さんと業務連絡以外で会話をはずませたことはない。
「社長は奥ですか？」
「はい。奥でお待ちです」
素っ気ない、事務の女性と担当営業マンの単なる言葉のやり取り。
俺は、奥の社長室で、いつも通りの連絡と取引内容を確認すると立ち上がった。社長室の扉を開けると、いつものように横目で愛美さんを確認した。愛美さんは、いつも通りに電卓を叩いて、ノートに赤ペンを走らせている。
「どうも、お邪魔しました」
そう言うと愛美さんの横を通り過ぎた。軽く会釈をした愛美さんは、こちらを振り向かなかった。俺は、扉を開け、足を一歩外に踏み出したところで足を止め、決心したように振りむいた。
「あの・・・、あの、今日、仕事が終わったら、少しだけ、お話しできませんか？」
愛美さんは、ピクッと身体を揺らしたが、こちらを振り向かずに言った。
「何でしょう？ここじゃできない話ですか？」
俺は、身体ごと愛美さんの方に振り返ると
「そうです。少しだけでいいので、お願いします」
俺は、頭を下げたまましばらく動かなかった。
「分かりました。分かりましたから頭を上げてください」
愛美さんは、立ち上がって、申し訳なさそうにこちらを向いた。
「ありがとうございます」
俺は、そう言って、そそくさと後ろを向きドアを開けると同時に外に出た。俺は、何か、営業マンが契約を取るときの泣き落としの作戦のようだ、と、心の中でフッと失笑しながら宙を仰いだ。こんな誘い方しかできない今の現状に、俺自身、嫌気がさした。

「あの、何か、食べますか？」
俺の質問に愛美さんは、

「いえ、今日は遅くなるって言ってきていないので・・・」
やはり、俺の疑いは晴れていないのだろうか？あの大みそかの晩、俺と愛美さんの間には紛れもないしこりができた。しかし、新年の挨拶の帰り際、愛美さんは俺のことを追いかけてきてくれた。それなのに、俺は、素っ気なく愛美さんをあしらってその場から逃げてしまった。
「分かりました。じゃあ、珈琲でも」
そう言って、俺は、喫茶店へ足を向けた。

「あのぉ、今さら弁解なんてしないですけど、あの時、僕は、本当にやましい気持ちなんてなくて・・」
弁解していた。愛美さんは、いつの話を突然始めたのだろうと、少し戸惑っているようだった。俺は、意を決して言った。
「でも、すみません。愛美さんを嫌な気分にさせてしまって・・。実は、僕・・・、あの・・・行きずりの女性と・・・関係を持ってしまって・・・」
そこまで言った時、今までこちらを見ていた愛美さんの視線が定まらなくなった。どこに目をやっていいものか迷っているように見えた。でも、明らかに、俺をさげすむような目のやり場を探して困っているような態度だった。
「すみません。だから、もう、僕に愛美さんと付き合う資格なんてなくて・・・」
俺は、うなだれて、頭を上げることができなかった。そんな俺をチラチラと見ながら気まずそうにしていた愛美さんは、突然ハッと気づいたように言葉を口にした。
「もしかして、行きずりって、あのイブの夜ですか？」

15、
「じゃあ、もしかして、・・私のせい・・・そうだったんですか？」
予想もしない愛美さんの一言に、びっくりして顔を上げた俺の目を、愛美さんはまっすぐ見つめた。
外の気温は、一段と下がり、室内の暖かさを、窓に結露した水滴が物語っていた。その水滴が一滴、ツーっと流れ落ちた。
「えっっ、いや、愛美さんのせいだなんて、そんなことないです。悪いのは、全部僕の方で」
そこまで行った時、愛美さんは、うつむき加減に
「ごめんなさい。私が、連絡もなく健太さんを待たせて、・・その上、大人げないこと言って。・・・私、全然、気にしませんから、「行きずり」なんて。・・・あの、・・話してもらったことの方が大切で。」

愛美さんの「全然、気にしない」と言う言葉が俺の胸に刺さった。平然と言った言葉の裏には、本当は、ものすごく気になって、気が気じゃないと言う愛美さんの本心が隠れているのだと、それが痛いほど俺に伝わった。俺は、仕事とはいえ愛美さんを一年以上見てきたのだ。少しは愛美さんの気持ちだって分かる。それに、結婚まで男性との関係を持たないと言うような女性が、行きずりの情事を簡単に許せるはずがない。でも、最初の約束を自分で破ってしまった負い目と大人げない言動を詫びようとでもする一言に俺は心が痛んだのだ。
「あの、・・実は、私、あの大みそかの晩で、フラれて終わってしまったんじゃないかと思って・・・。・・・・もう一度、・・・・やり直せますか？」
愛美さんの絞り出すような声だった。
「私、健太さんのことが好きみたいなんです。よく分からないけど、逢えない時、ずっと気が気じゃなくて、どうしようもなくて。でも・・素直になれなくて。・・・私、色々、変わっていきますから」
俺に、合わせてくれようと言うのか。健気な愛美さんに俺は、心からお礼を言いたかった。と同時に、俺は、愛美さんにどうしても言わなければならないことがある。
しばらく、二人の間に、沈黙が訪れた。
夕食の時間と言うこともあり、喫茶店でも珈琲だけをすすっている客は少ない。ナポリタンやサンドウィッチを口に頬張りながらこちらをチラチラ気にしている客もいる。俺は、氷の解けかかった水を口に運んだ。そして、目を伏せている愛美さんに向かって言った。
「ありがとうございます。愛美さんの気持ちはすごく嬉しいです。・・・でも、・・ごめんなさい。本当に、身勝手なことを言っているのは分かります。でも、・・・僕は・・・その女性を好きになってしまったんです。・・・すみません。こんな気持ちのまま、愛美さんと付き合うことはできません。本当に、ごめんなさい」
今度は、俺がうなだれ、愛美さんを見ることができずに、目を伏せた。
しばらくの間をおいて、愛美さんは言った。
「ほんとに真面目ですね。真面目だけが取り柄の人だとは思ってましたけど、本当にクソが付くぐらい真面目な人だったんですね。でも、そこが好きだったんですから、しょうがないですね」
少し、ほほ笑み加減でしゃべり終えた愛美さんは、深くため息をついた。俺は、何も言えず、一度上げた顔をまたうなだれた。愛美さんの「クソ」と言う言葉が、愛美さんの本心を全て物語っているようだった。
「私、行きますね。お父さんがお腹減らして待ってるし」
そう言った愛美さんの顔は、もう笑顔だった。
「今後とも、うちの印刷会社、よろしくお願いしますね。営業マンさん」
喫茶店を出ていく愛美さんの後ろ姿を目で追いながら、俺は、最後の「営業マンさん」の意味を考えていた。愛美さんなりの今後の俺が一営業マンとして石原印刷に関わっていかなければならない、やりにくさをぬぐってくれたのではないかと思うと、本当に愛美さんの女

性としての素晴らしさを改めて感じるのだった。
そして、愛美さんとは、これで終わった。美咲ともあれ以来、連絡はとれない。そう、美咲とも終わった。俺は、一人になり、また、仕事に打ち込まなければならない。アパートでも、コンビニ弁当と、カップ麺の生活がまた戻ってくる。
俺は、椅子の背にもたれ、テーブルの上で、ガラスの傘の中にぼんやりオレンジに光る裸電球を眺めた。ゆっくり立ち上がると、喫茶店を後にした。
「俺の春は、来るのかなぁ・・・」
コートの襟を立て、満天の星空の中を歩いた。

三月の下旬、桜のつぼみが暖かさを待ちきれずにはち切れそうに膨らむ頃、俺は、あの病院にいた。あの時は、美咲が隣に座っていた。同じ待合室の同じ椅子に腰かけ、名前を呼ばれるのを待っていた。もう、美咲の顔が普段の生活の中でチラつくこともなくなっていた。が、やはり、一緒の思い出の場所に来るとふと頭を美咲の顔がよぎる。
「どうしてるかな？」
俺は、無意識に呟いた。
「田中さーん」
郷愁に浸りかけた瞬間、名前を呼ばれた。立ち上がって、診察室のドアのノブに手をかけた。ちょうどその時、何気なく奥まで続く廊下の先に視線がいった。
「えっっ！？美咲！？」
「どうぞ、田中さん、中へ」
看護師さんに促され、椅子の前まで行ったが、俺は、廊下の奥を横切った女性が美咲のように思えて仕方なかった。俺は、椅子にこのまま座ってしまうことができずにそのまま突っ立っていた。
「どうぞ、おかけくださいっっ」
少し、いらだった声で先生にも促されたが
「ちょっと待ってください」
俺は、突然２、３歩後退りするとドアを開けて、廊下の奥の方を覗き込んだ。しかし、美咲がいるわけもなく、美咲を思い出していたせいで錯覚でも見てしまったのかと、俺は、先生の前の椅子に座った。眉間にしわを寄せていた先生はカルテを眺めながら言った。
「結論から言いますと、陰性です。抗体は見つかりませんでした」
「そうですか。ありがとうございます」
俺は、先生にお礼を言って頭を下げた。確かに、嬉しい報告だった。が、しかし、今の俺には、そんなことより、あの美咲が、本当に幻覚なのかを確かめなければならない気持ちの方が脳全体を支配していた。

診察室を出ると、急いで廊下の奥へ歩いた。その奥は、入院棟になっていた。俺は、ナースステーションで、美咲の名前を告げ、美咲の所在を確認してみた。
「はい、302 号室です」
「えっっ！？」
あまりに簡単に予想もしない答えが返ってきた。驚きの表情を隠せないまま、俺は、半信半疑で、三階に上がった。302 と書かれた部屋を恐る恐る覗き込むと、４つのベッドがある。窓際に面した二つのベッドの片方に起き上がって外を眺めている女性がいる。こわごわ近づいてみると、その女性は、こちらを振り向いた。
「ええっっ！？」
紛れもなく美咲だ。
「美咲っっ！？」

16、
「美咲、・・なんでこんなとこに・・・？」
ハトが豆鉄砲でも食らったような顔をしている俺に向かって
「あーあ、見つかっちった」
若干、痩せたようにも見える美咲は、以前と変わらず明るかった。
「なんでこんなとこに・・？」
同じ質問を繰り返す俺に美咲は言った。
「そうか、もう一度、検査に来るって言ってたもんね。失敗、失敗。で、検査どうだった？」
俺の質問を無視するところなど、以前と変わらない美咲がここにもいた。
「あ、いや、大丈夫だった。あ、いや、おまえは？・・なんで？」
「ちょっと、風邪、こじらせた。でも、もう寝てたら治った」
確かに、どこか悪いようには見えなかった。
「そうか、じゃあ、もう退院するのか？」
「んーー、まだ、先生と話してないから分からない」
目をパチパチしてそう言うと美咲は首をかしげてにっこりした。
「あっっ、そうだ、俺、まだ会計してないや。じゃ、行くな」
「おうっ」と言って手を上げた美咲を横目に、俺は、こんな劇的な再開がこの世の中にあるのだろうか、夢でも見ているのではなかろうかと、頬をつねりながら階段を下りた。ナースステーションの前で軽く頭を下げ、通り過ぎようとした時、急に呼び止められた。
「あの、ご家族の方ですか？」
さっき、部屋を聞いた看護師さんがこちらを向いて手招きしている。

「はい、・・・なにか？」
近づいた俺に、その看護師さんは耳打ちするように小声で言った。
「ちょっと、よろしいですか？」
びっくりしている俺の脇に来て看護師さんは、手を引くように俺を「空室」と書かれた面談室へ案内した。俺は、不審に思いキョロキョロしながら椅子に座った。ほとんど同時に、お医者らしき白衣の男性が現れて、俺の向かいに座った。
「・・・あの、・・ご存知か分かりませんが、彼女は、ＨＩＶに感染しています」
重々しい空気の中、白衣の男性は言った。
「・・え、ああ、知ってますけど・・・」
俺が、答えると、すぐにその医者らしき男性は続けた。
「そうですか。あの、まだ、本人には伝えていませんが、彼女は、エイズを発症しています」
何食わぬ顔でうなずいた俺は、
「えええっっ！？」
驚きの声をあげた。
「えっ、発症って、あのぉ、発症しない薬ってのがあるんじゃないんですか？」
俺は、目の前の医者に食いつかんばかりに前のめりになった。
「落ち着いてください」
男性は、両手で俺を制すると、ゆっくり話し出した。
「どうやら、彼女は、薬を飲んでいなかったようです。私だって、検査結果を疑ったんですから。仮に発症するとしたって、こんなに早くと言うのは聞いたことありませんから」
なんということだろう。俺は、この劇的な美咲との出会いを神に感謝すらした。そして、俺の陰性の報告。全てがうまくいくと、そして、また、美咲と一緒に暮らせると思った矢先に、信じがたい嘘のような突然のエイズ告知。
「なんで？」
俺は、一言、蚊の鳴くような声で呟いた。そして、階段を上り始めた。長い階段だった。さっきも上ったはずなのに全く違う階段に思えた。美咲には、どう告げたらよいのだろう？素直にただエイズを発症したと言えばよいのか？それとも、エイズを隠してこのまま、様子を見ようか。俺は、悩んだ。俺は、何度、天国から地獄へ突き落されればよいのだろう。部屋を覗くと、美咲が先ほどと同じ体勢で外を見ている。俺が、近づくと
「あれ？戻ってきた」
美咲は、不思議そうに俺を見つめた。
「なあ、美咲、ちょっと歩かないか？」
俺は、周りの目が気になる大部屋から美咲を連れ出し、病院の中庭をしばらく歩くとベンチに腰掛けた。
「座れば？」
病院の大きな桜の木は、春の日差しを浴びて、いくつかのつぼみだけが先を急いでピンクの

花びらをいっぱいに広げている。
「寒くないか？」
俺は、腰かけた美咲にジャケットを羽織らせた。
「どうしたの？相変わらず暗いねぇ。あの女性（ひと）にフラれた？」
美咲は、こちらを向くと無邪気に俺に語りかけた。
「まあ、そんなとこかな。それより、美咲、退院したら、また、一緒に暮らさないか？」
俺は、また桜の木に目を向けてしまった美咲を見つめた。
「なんで？フラれたから？」
美咲はチラッと横目で俺を見て言った。俺は、微笑んで軽く頷いた。美咲は、それ以上、何も俺に聞くことはしなかったが、一緒に暮らそう、と言う俺の質問に答えることもなかった。俺は、美咲の笑顔を見ていると、とてもエイズを発症した、などとは言えなかった。目の前の桜を見ながら、俺は桜の花の一生の短さが美咲の人生と照らし合わされているように思えてならなかった。
次の日から、俺は、会社の帰りには必ず、美咲の病院を訪れた。
「ねぇ、そんなに毎日来なくても大丈夫だよ。って言うか、あたし、退院できないのかな？」
俺は、もう隠し通せないと腹をくくった。
「美咲、おまえ、薬飲んでなかっただろ？」
俺の真剣な眼差しに美咲は驚いて、
「飲んでるよ。ちゃんと」
「そうじゃないよ。入院する前、発症を遅らせる薬。飲んでなかったろ」
美咲は急に何かに気付いたように身体を揺らすと、しばらくして唇を噛んで言った。
「・・そう、あたし、発症したんだ。だから、退院できないんだ」
「えっっ、あっ、いやぁ・・」
俺は、何も言えなかった。椅子の背にもたれて、宙を仰いだ。
「あたし、お金ないし、あんな高い薬、飲めるわけないよ。それに、一生飲み続けるなんて無理だし・・・」
そう言えば、美咲と暮らしたしばらくの間も美咲が薬を飲んでいる姿を一度も見たことがなかった。その時に気付くべきだった。俺は、あまりに自分のことしか考えていなかった。今さらになって後悔の念が押し寄せてくる。でも、今となっては、もうどうすることもできない。美咲の心の支えになっていくしかない。そう心に決めた。
俺からエイズを聞かされた美咲は、次の日からも、今までと全く変わらず笑顔だった。逆に俺の方が美咲のこれからの命の短さを考えると、暗く病人のように見えてしまうくらいだった。とにかく、美咲の免疫が少しでも、破壊されないよう俺は、細心の注意を図るように心掛けた。そんなことが長生きにつながるのか分からなかったが、「免疫力活性」のＣＤを買ってきて一日中流した。少しでも、生きる希望になるよう、俺は毎日、将来の夢の話を美咲に話して聞かせた。美咲は、物心ついた時から、自分がエイズであることを知り、将来の

夢についてなど考えたこともなかったらしい。
梅雨が明け、セミが騒々しく鳴き出したころ、美咲に軽い夏風邪のような症状が出た。
そのタイミングで、美咲は個室に移った。
美咲は、それまでの元気が嘘のようにそれからの症状の悪化はものすごいスピードで進んでいくのだった。

17、
美咲がこの病院に入院してもうじき半年が経とうとしている。
「ねぇ、この病院の入院費どうしてるの？あたしの貯金なんかとっくに底を着いてるでしょ？」
「そんなことより、おまえは、良くなることだけを考えてりゃいいんだよ」
俺は、美咲が個室に移った時から、しばらくして週に３日はここに寝泊まりするようになった。美咲の咳が止まらなくなり、夜も眠れずにいるようだったので、ここから会社に行き、ここに帰ってくる生活を始めたのだ。何ができるわけではなかったが、とにかく、少しでも近くに居たかった。
美咲は、半年前、俺のアパートを出ていったあと、頭痛がひどくなり、吐き気も伴ったので、病院へ行こうと思ったらしい。しかし、病院の通院などしたことがなく、どこの病院へ行ったらよいかわからず、俺の検査の時に来たこの病院へ来たようだ。そして、検査の結果、エイズを発症していることが発覚し、本人は知らずに、そのまま入院。たまたま俺がその数日後にやってきて、連絡の取れる身寄りのいない美咲の告知を医師が俺にしたらしい。

「先生、今の医療では、エイズで死ぬことはないって聞いてますけど・・・」
俺は、担当医を前に、今の美咲の症状について聞いていた。
「ええ、確かに。しかし、100％ではありませんし、今回のケースは、本人に治りたいと言う意思がないんじゃないでしょうか？エイズは免疫の病気です。私は、本人の意思がとても重要ではないかと思うんです」
ここのところ美咲の体重が急激に落ちてきた。夜、咳込んで眠れないことも原因しているのかもしれないが、薬をちゃんと飲んでいても、こんなに悪化してくるのだろうか？

美咲の体重も戻らないまま、さらに２か月を経過しようとしていた。夏の暑さは、セミの鳴き声と共に去って行った。夜には、鈴虫が合唱し、じきに木枯らしの季節がやってくる。そんな夜、美咲の身体を拭いていると、赤い斑点のようなものを背中に見つけた。あまり気にしなければ、見落としてしまうくらいの薄い斑点だったが、よく見ると、腕や腰などにも数

か所赤くなっている。タオルを当てて、美咲に痛くないか聞いてみた。
「えっ、全然、痛くないよ」
そう言葉を返したが、最近、また頭痛もひどいらしい。しかし、美咲は、俺の前では、決して痛がる素振りを見せようとしない。
「本当か？ほんとに痛くないか？」
俺は、改めて美咲の顔を窺ったが、美咲は軽く笑顔を見せると言った。
「今日は帰んなよ。明日、早いって言ってたじゃん」
「そうか、大丈夫か？」
美咲が寝間着を着るのを見届けると俺は、席を立とうとした。
「大丈夫、大丈夫。そんなに毎日来てくれなくても平気だよ。ゴホ、ゴホ」
強がる美咲を眺めながら、俺は、スーツの上着に腕を通した。
「なんかあれば、すぐにナースコールのボタン押すんだぞ。おまえは、一人で我慢して中々助けを呼ばないからな」
俺が、ここに泊まるようになったのは、看護師さんから聞いた、あることも理由の一つだ。美咲は、夜中、相当咳込んでいても、決して枕元のボタンを押さないらしい。一人で、耐えて、その夜を乗り越えてしまうらしいのだ。俺に対しても、絶対に弱音を吐くことはない。いつも笑顔でいようと、自分の苦しさを表に出さないようにしている。そんな健気な美咲を俺は、どうしても守らなければならないと思ったのだ。
あの、赤い斑点は、数日のうちに濃さを増していった。１週間も経つと、赤身はどす黒く、ただれるようになってきた。美咲の咳も夜だけでなく、昼間でも頻繁に咳込むようになっていた。
俺は、先生に呼ばれた。話の内容はこうだ。
美咲は、渡された薬を、規定量しっかり飲んでいない。どうやら、飲んだり飲まなかったりで、勝手に飲まない薬は処分してしまっているようだ。そして、その薬と言うのは、しっかりと既定の量を飲まなければ、身体のウィルスに対しての抗体ができてしまい、どんどん効かなくなってしまうようなのだ。そのせいで、美咲は急激に症状が悪化している。とりあえず、酸素吸入器をつけて咳の緩和を見込みたいと言うことだ。このままだと点滴も必要になり、俺に何とか薬を自分で飲むように説得してほしいと言う。美咲は、おそらく、もう治らない病気だと諦めてしまっているのではないか、と先生は言うのだ。
俺は、病室に戻り、目をつむっている美咲の寝顔を眺めながら、なぜ、美咲が薬を飲みたがらないのか考えていた。俺は、ずっと美咲を見守っていく、そう約束した。ずっと一緒にいる、そう約束した。なのに美咲は、死を急いでいるとしか思えないのだ。
俺は、次の日の朝、病室を後にすると市役所へ向かった。
俺は、窓口で婚姻届けの用紙を受け取った。その日の会社の昼の休憩時間に名前を書いた。そして、印鑑を押した。俺は、美咲と運命を共にする決心をした。しかし、口だけでは美咲を安心させられない、そう思ったのだ。会社が終わると美咲のもとへ急いだ。ベッドの美咲

は、さらに痩せて頬がこけたように見えた。
「毎日来なくてもいいって言ったのに・・・」
美咲は、酸素吸入器の中からかすれる声を俺に投げかけた。
「美咲、これ」
そう言って俺は、かばんの中から婚姻届けを取り出した。
「なに？」
目を細めるように美咲は、俺の手の中の紙切れを受け取った。
「なんで？」
美咲は、絞り出すように言葉を発した。
「俺が、ずっと守るって言ったろ。美咲、・・元気になったら教会で結婚式、挙げよ」
「あたし、神前の方がいいな。白無垢、着てみたい。ゴホ、ゴホ、ゴホ」
美咲は、赤い斑点の手で酸素吸入器を口から外して言った。
「おい、それ、外すなって」
美咲は、吸入器をまた口に当てると
「だって、しゃべりにくいんだもん」
そう言って笑った。おそらく、その笑顔と裏腹に、全身の赤くただれた斑点は想像を絶する痛さなのだろう。そして、吸入器の中の乱れた息づかいは、もう酸素吸入器なしでは、咳も止まらなくなっているのかもしれない。
「ちょっと、売店行ってくる」
俺は、それでも俺の前で笑顔を見せようとする美咲に胸がいっぱいになり涙が込み上げた。それを悟られまいと病室を出た。でも、美咲は婚姻届けを受け取った。これで薬を飲んでくれれば、少しは病状も改善されるかもしれない。俺は、淡い期待で美咲を見守ることにした。
「美咲、早く良くなってくれ」
俺は、独り言のように呟いて、目の前の階段を一歩ずつ下りていった。

18、
それから、約一か月、美咲の容態は改善されるどころか、さらに悪い方へ進んだ。そして、ついに、点滴を投与されるようになった。
飲まなければいけない薬も、それだけで、お腹いっぱいになってしまうのでは、と言うように増えていた。そして、もう、薬での治療は不可能と言う医師の判断のもとの点滴だった。
美咲は、婚姻届けにサインをしてくれたのだろうか？俺は、気になって、枕もとの周りに目線を走らせた。
「どうしたの？」

寝ていたと思った美咲は薄く目を開けて、咳込みながら、俺を睨んだ。
「いや、別に・・・」
俺は、美咲の額に手を当てると、首をすくめた。やはり、美咲の額は、火照っている。
「美咲、辛くないか？」
俺は、幾度となく、熱の下がらない美咲に聞いてみるのだが、答えは決まって「大丈夫」と首を振るだけなのだ。
「もうじきクリスマスが来るな。覚えてるか？俺とおまえの出逢い。たった一年なのに、えらく長かった気がするな。この一年、ほんとに色々あったなあ」
俺は、美咲を横目にぼんやり天井を見つめて言った。感慨にふけっている俺に、美咲は何も答えず、ただ黙っていた。少しして、俺は、寝てしまったのかと、チラッと美咲に目をやった。
「えっっ！？美咲っ！」
さっき触ったばかりの額から大粒の汗が噴き出ている。眉間にはしわが寄り、見ている間に息も苦しそうにひきつった顔になった。
「だいじょぶか？先生――」
俺は、枕もとのボタンを慌てて押すと叫んだ。
「誰かーーー」
バタバタと廊下を走る音が聞こえて看護師さんが飛び込んできた。その瞬間、ゼーゼーと苦しそうだった美咲は、咳込むのと同時に血を吐いた。看護師さんは、酸素吸入器を素早く口から外すと美咲を横に向けた。
「先生呼んできます。このままちょっと待ってください」
走り出した看護師さんを見届けると俺は、ベッドの向こうを向いている美咲の肩に手を当て、顔を覗き込もうとした。顔が目に入る直前、美咲は再度咳込みながら血を吐いた。
「せんせ、せんせー」
俺は、叫んだ。
「ちょっと、そこどいて」
足早に入ってきた先生に押しのけられ、俺はよろけた。ふらつく俺を看護師さんが支えた。
「はい、大丈夫ですよぉ。君、ストレッチャー用意して」
「はい」
後ろの看護師さんは、返事をするとまた部屋を走り出た。先生は、美咲の脈をとりながら寝間着のボタンを外している。動揺を隠せず、あたふたする俺に向かい先生は
「大丈夫です。患者さんの血には触れていませんか？とりあえず、心電図モニターはつけることになると思います」
そう言った。俺は、あまりに落ち着き払った先生の様子に衝撃を受け、逆に美咲の容態は大丈夫なのかすら聞くことができなかった。
その後美咲は、ストレッチャーで運ばれて行き、どこかで処置を受けたのか、別の病室へ移

ることになった。その間、俺は、ただ、呆然と立ち尽くし、じきに現れた看護師さんに促され、病室を移る手続きの用紙にサインをした。俺は、印鑑を押し、病室で片づけをしていた。その時も、開け放たれたドアの向こうで看護師さんたちが慌ただしく走っている様が伺えたが、俺は、気にせず片づけを進めていた。シーツの剥がされたマットに乗った枕の下から、何か、紙の切れ端が見えた。何気なく俺は、枕をどかすと、そこには、紙の四隅がくしゃくしゃに丸まった婚姻届けがあった。俺は、その婚姻届けのしわを伸ばそうと手に取った瞬間、
「田中さん、来てください」
いきなり現れた看護師さんに手を掴まれた。足早に階段を下りると病室に案内された。
「お連れしました」
部屋の中には、先生と看護師さんが二人うつむいている。
「田中さん、容態が急変しました。処置は施しましたが・・・」
目の前の先生はそう言うと、頭を軽く下げ部屋を出ていった。二人の看護師さんもそれに続いて出ていこうとした。
「えっっ？」
俺は、何が起こったのか訳が分からず、看護師さんに視線を投げかけたが何も応えることはなく黙って部屋を出ていった。二人を見送るとベッドに目を移した。
俺の視線の先には、美咲が目をつむっている。酸素吸入器も、点滴もつけていない。足元に置かれた心電図モニターにも電源が入っていないようだ。部屋を移って、これから電源でも入れるのだろうか？俺は、不思議に思い、美咲に数歩近づいた。さっきまで、眉間にしわを寄せて歪んでいた顔も、少し微笑んだ笑顔のように見える。俺は、軽く美咲の頬に触れて、その瞬間、手を引いた。
「冷たい・・・」
あれほど熱を帯びていた顔の火照りは無くなり、むしろ死んでいる人のように。
「ええっっ？？？」
俺は、唖然とし、美咲の肩にしがみついた。
「おいっっ、美咲っ、おいっっ」
肩をゆすった。ベッドがきしむくらいにゆすった。しかし、美咲はピクリともしない。俺は血の気が引き、一瞬身体を起こした。そして、もう一度美咲を眺めて、全てを理解した。
「おいっっ、美咲ぃぃぃ」
「おいっっ、白無垢、着るんだろぉぉぉ」
俺は、美咲の上へ倒れこんだ。溢れ出た涙は、ぬぐっても、ぬぐっても、目の前が霞むくらいにあふれてきた。何度、美咲の名を呼んでも、返事を聞くことはできなかった。
もう二度と・・・。

あまりに呆気ない幕切れだった。
一年近くも美咲と病院で過ごしたと言うのに、最後は本当に一瞬の出来事だった。白い布切

れの乗っかった美咲の顔は、死んでしまった後まで、俺に笑顔を見せてくれている。あれだけ苦しんだはずなのに、美咲はとうとう最後まで、ほとんど俺に苦しみの顔を見せることはなかった。美咲との思い出を噛みしめながら、荷物の置かれた部屋に戻ると、ベッドの上に投げ捨てられた婚姻届けが、ひらりとベッドの端から床へ落ちた。慌てて拾い上げると、さっきは気付かなかった文字らしきものが裏にびっしり書かれている。
俺は、その文字を目で追った。何日にも亘って書かれたのか、文章が進むほど、その文字は薄れ、震えた文字になっている。やはり美咲の体調の悪化は、ペンを持つ腕にまで浸透してきていたのだろう。俺は、その文章を読み進めるうちに、涙で字を読むことが出なくなった。手の甲で目をこすりながら、最後まで読み切った時には、婚姻届けはこぼれ落ちた涙でふやけていた。俺はすすり泣きながら、その紙切れを握りしめた。俺は、こんな素晴らしい女性と一緒にいられたことに感謝すらした。
でも、もうその美咲はいない。
俺は、誰もいない病室で、ただ一人、呆然と立ち尽くしていた。
ただ、ただ、立ち尽くすしかできなかった。
いつまでも、いつまでも、真っ白い病室の壁を見つめ、ただ呆然と立ち尽くすのだった。
俺の胸にぽっかり空いた空洞を吹くはずのない風が通り抜けていった。

あとがき

けーたへ

けーた、色々ありがとう。そして、ごめんなさい。
けーたと初めて会ったクリスマスの日、私は、けーたともお金だけもらってさよならしようと思ってた。でも、何となく残した携帯のメッセージを見て、けーたは、私にもう他の男と逢うなって言ってくれた。嬉しかった。そんな男の人、初めてだった。でも、だからこそ、けーたには、私の本当の姿を言わなきゃいけないと思ったの。もしそれで終わったとしても、どうせ生きる希望なんかなかった私だから、死んでも構わないって思ってたの。でも、けーたは、死ぬなって言ってくれた。生まれて初めて、人を「好き」になる気持ちが分かったの。苦しかった。人を好きになるのって、苦しいね。
けーたも私のことを「好き」って言ってくれた。でも、私は、エイズなの。いくら、薬で発症を抑えたって、治ることは一生ないの。どんなに長生きしても一生エイズなの。
私は、自分のしてきたことを本当に後悔した。けーたにエイズを移してしまったと思ったから。でも、けーたにエイズは移ってなかった。それ聞いた時、本当に心の底から嬉しかった。でも、悲しかった。だって、私はエイズだから、子供好きのけーたと一緒になることはできないの。私は、けーたが好き。好きな人の幸せを願うのは当然でしょ。私とは幸せになれないの。だから、あのひとのところへ行ってほしかった。行って、幸せを願いたかった。
私は、けーたが好きなの。
けーたは優しいから、絶対私のことをほっとかないと思ったの。だから、何も言わずに消えたの。私と一緒にいちゃだめなの。でも、まさか、病院で見つかっちゃうなんてね。失敗、失敗。あのひととはどうなの？私、そろそろダメみたいだから・・・。ちゃんとあのひとのところに行ってね。私は、けーたの幸せを祈ってる。
私は、けーたと一緒にいられて、本当に幸せだった。本当に・・・
ありがとう、けーた。
最後にわがまま言っていい？
私が死んだら、骨は山にまいてほしいの。土にかえるの。お願いね。
けーた。ありがとう。
最後まで、お世話になっちゃった。本当に、本当に、ありがとう。
そして、さようなら・・・　　美咲

なんで、こんな若さで美咲は逝かなければならなかったのだろう。
死ぬ直前まで俺のことを心配して、最後の最後まで笑顔のまま逝ってしまった。

俺は、一週間後、粉々になった美咲の骨を抱えて、山に登った。あと二週間もすればクリスマスがやってくる。足元には、三日前に降った雪が、うっすらと目の前のけもの道を白くしている。
美咲は、おそらく、俺に世話をかけまいと、薬を飲まずに自分で死への道のりを早めていたのだろう。俺と愛美さんのことや、俺の子供のことまで気にかけて、そんなこと頼んでもいないのに・・・
俺は、ただ、美咲と一緒にいたかっただけなのに・・・
そんなことをぼんやり考えていると目の前に大きな木が見えてきた。当然、花など咲いてはいないが、間違いなく桜の木だ。俺は、粉のようにさらさらした骨を両手ですくい出すと木の根元にまいた。骨は、白い雪に溶け込むように見えなくなった。
美咲、さよなら・・・
俺は、手を合わせ、
「春になったら、美しく咲き誇ってくれ」
一人、呟いて、桜の木を後にした。
ありがとう、美咲・・
そして、本当に、・・さよなら、美咲・・・・・

おわり

この小説は、僕が、１０年ほど前に、ある血友病患者の手記を読んだときに、こんな小説を書いてみたいなあ、と思い、書き始めたのです。１０年という歳月は、途中、あることで、しばらく小説から足を遠ざけていたため、こんなに完成まで長い歳月が経ってしまったのです。時代背景がおかしなところもあったかと思いますが、最後まで、健太の気持ちを知りながら、婚姻届けのサインは裏にしただけ、と言う健気な美咲を最後まで見守っていただいた読者の皆様、本当にありがとうございました。